



いのち新聞

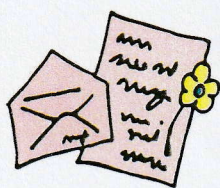
春号 (No. 1) 編集長

2013年2月

おもかげ復元師 笹原留似子

「いのち新聞」のはじまりにあたり

東日本大震災が発生し、それぞれの立ち位置から、いのち新聞メンバーは震災に関わってきました。津波により故郷が壊滅したり、大切な家族を亡くしたり、被災地の学校として東日本大震災に取り組んだり、17歳から50歳までの11名のメンバーにより、構成されています。岩手県内の、各被災地に住む仲間と共に、更なるご縁を大切にしながら思いを文章に変えて、「いのち新聞」から様々な思いを発信させていただきたいと思います。



故郷を離れた人たちへも届きますようにと願いを込めて、スタートしました。新聞メンバーは一人又一人と東日本大震災の悲しみをとお話しされるために、私の所を尋ねてくれた人たちがつながったチームとなります。どうぞ、末永くご愛読ください。

(おもかげ復元師 笹原留似子)

やさしい手

やわらかくてあったかい優しい良い手だね。おばあちゃん、あなたの手大好きだよ。」

これは小さい頃、自分の手にコンプレックスを抱えていた私におばあちゃんがくれた言葉。

生まれつき手の皮膚がボロボロで、友達に手をつなぎたくないと言わせたことがある私は、びっくりしました。いつも嫌がられている自分の手がほめられるなんて思っていなかったから少し嬉しかったなあ。

お医者さんが生まれたばかりの私に「大きくなったら治るから大丈夫」と言っていたけど、未だにカサカサ。でも、おばあちゃんのおかげでそんなに嫌じゃない。いつかおばあちゃんが忘れても、私は忘れないよ。大好き。

(高校生Kちゃん17歳)

旧陸前高田市役所も解体が始まり、三分の二ほどが取り壊されていました。新しい街づくりに必要なことですが、とても悲しい想いになります。



旧陸前高田市役所庁舎
H25.2.14 撮影



災害公営住宅予定地の盛土の様子
(陸前高田市出身 Iさん)

ご支援を！

子どもたちが七人集まって舞う、七福神の民俗芸能です。

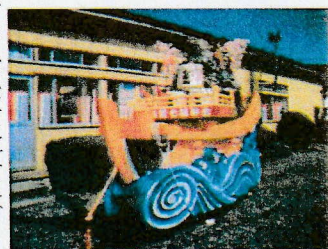
雁舞道(がんまいどう)七福神保存会。東日本大震災で、被災しました。



雁舞道七福神

祭りでねり歩いた町並みは変わり果て、山車も被災しました。今年で60周年だった保存会。保存会のメンバーは、被災して亡くなった方、まだ見付からない行方不明の方がいます。

雁舞道地区(現在の安渡1丁目)は津波の危険区域になり、もう住めなくなるそうです。しかし、それでも山車の元集まることで、七福神を踊り続け、ずっと家族のような絆を続けていきたいと考えています。9月の秋祭りで、山車をもう一度造りたいとおもっているの、ご支援可能な方は是非、宜しくお願いします。



雪の日の出来事

5歳の娘は、雪が大好き。雪が降るとさっそくお外に。「ママ、かつらって知ってる?」と聞くので、「うん。知ってるよ。」と答えると「かつらって、屋根にくっついてるんだよね」と雪かきしながらごく当たり前に話してきました。

私の頭の中は、???。動揺を隠しつつ、「それは、つらら! かつらは人の頭についてるもの」といらないことまで教えてあげました。そんな些細な出来事も母が生きていた頃は、電話やメールで報告し、子どもたちの成長を語らいながら大笑いしたものでしたが。子どもたちと私のやりとりをあの笑顔を浮かべながら近くで見ているんだろうなと思っている今日この頃です。



(陸前高田市出身 靴屋のゆきのちゃん)

編集後記

最初は震災のこと、いのちのことを話し合う集まりから、年齢をこえて、職種をこえて、新聞作りが始まりました。たくさん話し合う中で、第5回目で新聞の形となりました。編集部員としては、震災で家族を亡くした人たち、自殺で家族や友人を亡くした人たちで、内容は編集、構成されています。新聞の投稿を募集しています。あて先は、〒024-0024

岩手県北上市中野町2丁目28-23

株式会社 桜内 「いのち」新聞編集部係

「天国へいった大切な家族へ」コーナー、「こんな復興活動があったらいいな」コーナー等、皆様からのお便りも募集します。この新聞は、笹原の講演、メンバーの各活動の中で配布致します。